



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1990年代以降の日本におけるゲイ男性のアイデンティティ形成：自己変革／社会変革活動における表象の戦略的利用 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	斉藤, 巧弥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第13979号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78340
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takuya_Saito_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：齊藤 巧弥

審査委員	主査	准教授	原田 真見
	副査	准教授	濱井 祐三子
	副査	教授	玄 武岩

学位論文題名

1990 年代以降の日本におけるゲイ男性のアイデンティティ形成

—自己変革／社会変革活動における表象の戦略的利用—

令和元年 12 月 20 日午前 10 時半からメディア棟 608 室において齊藤巧弥氏の博士論文口頭試問を公開で実施した。まず本人より研究の概要と論旨について 30 分間で説明があり、その後審査委員による論評、それに対する本人からの応答と続いた。公開試問の参加者を交えた質疑応答も行われ、最後にこれらの内容を踏まえ、審査委員が学位論文の水準について慎重に検討・審査を行った。全体では約 1 時間 40 分にわたる試問となった。

審査委員による指摘は大きく 4 点にまとめられる。

まず、1990 年代以降の日本のゲイ男性が向き合う状況として前提とされている＜差別なき社会＞という捉え方の妥当性が問われた。諸外国に見られた法律的な可法性を持った差別や宗教上の教義に基づく極端なホモフォビアが日本には比較的少ない、といった点で＜差別なき社会＞という表現で意味しようとしている内容は理解できるが、それにしても社会のありようの捉え方が一元的であり、研究対象時期の社会の経済状況や価値観等、日本社会のコンテクストへのより丁寧な目配りが必要だったのではないかと考えられる。

二つ目として、比較の視点の不足が指摘された。対外的活動におけるレズビアン女性との関りを分析に組み入れたのは、ゲイ男性のアイデンティティと社会活動の特徴を浮かび上がらせる上で有効であったが、それだけにより踏み込んだ比較分析が欲しいところであった。また、他のセクシュアルマイノリティとの「連帯」について言及はあるものの、明示的な対照関係は示されていない。最初にマイノリティ論における基本的なモデルを踏まえておけば、議論が冗長になることもなかったのではないかと考えられる。また、3 章と 4 章で札幌ミーティングや札幌におけるセクシュアルマイノリティのパレードを分析対象に用いているが、比較という視点で考えれば、地方都市札幌というコンテクストの意味・意義を分析の中でどれくらい生かすことができたかは疑問の残るところである。

比較視点の不足は、第三の指摘である理論構築の弱さにもつながる。ゲイ男性にとっての社会運動には“「祭り」か「政治」か？”あるいは“「遊び」対「社会変革」”といった、対立的な戦略が見られたが、こうした社会運動論的アプローチと、ゲイ男性の活動が性愛を巡る事象と切り離し難いという発見との関連を丁寧に整理すべきであった。社会運動とアイデンティティの交錯のモデルを序論において示した上で個別の事例研究を考察することでより説得力のある議論を展開できたであろうことが悔やまれる。

四点目は表象をどう分析すべきかについての指摘である。2章では広い意味での自己変革活動としてゲイマンガを取り上げているが、自己変革活動／社会変革活動とアイデンティティの関りを問う上でフィクションの意味の検討が不十分であり、研究全体における第2章の位置づけが必ずしも明確ではない。また、本研究は表象そのものの分析に終始してしまったが、表象とアイデンティティ形成のつながりを考える上で、オーディエンスへの目配りは欠かせない。特に本研究が対象としたのが1990年代以降という比較的最近の時期であったことを踏まえると、分析にオーラルヒストリーを取り入れるべきであったと考えられる。

上記のような指摘に対し、社会や他のマイノリティについて広くまた詳細に目配りする必要は認めつつも、現代のゲイ男性のアイデンティティに影響を及ぼしていると考えられる1990年代以降の時代に実際何が表象されまた主張されてきたのかをまず可視化する重要性があったと本人より説明がなされた。一方で、他の社会運動との関連への目配りが足りず、理論構築にも改善の余地がある点については今後の研究活動での課題として自覚しているところである。また、指摘のひとつであったオーラルヒストリーに関しては本研究では踏み込むことができなかったが、かねてより本人も関心の深い課題であり、既に他大学の研究者との共同研究で取り組みが始まっている点についても説明があった。

内容についての厳しい指摘は、斉藤氏の今後の研究に対する審査委員一同の期待の裏返しでもある。膨大な一次資料や先行研究を読み込み、これまで見落とされていたゲイ男性の歴史の一片を資料化した意義は大きい。また、ゲイ男性を被差別者としてだけでなく、男性性というジェンダーに裏打ちされた存在としてそのアイデンティティ形成を描き出した点でも評価できる。アイデンティティ研究・社会運動論・マイノリティ研究・ジェンダー研究等幅広い分野での貢献が期待される研究として、本学院の博士論文にふさわしいと判断し、これを合格とする。